

# 元棚倉藩主阿部正功の収集遺物に関する予備的考察 —3種の「遺物目録」を手がかりに—

山田 英明・和田 伸哉

## 1 本稿の課題

陸奥国棚倉藩最後の藩主をつとめた阿部正功（1860－1925）は、人類学・考古学の黎明期に活躍した学者としても知られている（註1）。

阿部は自邸内に「陳列所」を設けるほど多くの土器や石器などを収集し、それらは彼の死後の昭和11年（1936）に京都帝国大学（現・京都大学）・東京文理科大学（現・筑波大学）・学習院（現・学習院大学）へと寄贈された。このうち、京都帝国大学に納められた分は同大学が所蔵する他の考古資料とともに目録化されているもの（註2）、他の詳細は不明で、さらにはいえば、そもそも阿部がどれだけの遺物を所有し、いつ・どこ（誰）から・どのようにして入手したのかという基本的な事項すら整理されていない。

そこで、本稿では、「陸奥国棚倉藩主・華族 阿部家資料（註3）」（阿部正靖氏寄託、学習院大学史料館収蔵）に残る3種の「遺物目録」を手がかりに、阿部正功の収集遺物に関する若干の考察を試みることとしたい。

## 2 阿部正功の遺物収集

後述する「遺物目録」における分類から明らかなように、阿部の遺物収集方法は、「採集」「寄贈」「買入」の3つに大別することができる。

「採集」とは、実際に現地に赴いて遺物を収集することである。彼は生涯を通じて数々の遺跡発掘に携わっており、とくに20代後半から30代にかけて精力的に遺跡を巡り、調査記録を残している（註4）。なかでも、明治31年（1898）に参加した芝丸山古墳の発掘はよく知られ、阿部自身による「芝円山古墳調査略記」（史料番号1422）は当時の発掘調査の様子を伝える貴重な史料といえる（註5）。

次の「寄贈」は、たとえば旧領民などからの献納である。阿部の遺物好き（というよりも、出土物好き）は有名であったようで、彼がお国入りした際には、旧領内からの出土物が宿所に届けられることもしばしばであった。たとえば、廃藩以来の帰郷となった明治13年（1880）には、村人が「化石数片」を持参して面会に訪れている（註6）。その後、阿部が人類学・考古学に傾倒していくにつれ、石器や土器を献上する人々が増えていった。

最後の「買入」は、文字通り金銭による購入と思われるが、どのような経緯によって、いくらで購入したのかは定かでない。

## 3 3種の「遺物目録」

阿部は実に筆まめな人物であり、自身が収集した遺物についても、多数の調査メモやスケッチなどを書き残している。ただ、収集品の全体像を窺わせる史料となると意外に乏しく、現時

点で手がかりとなりうるのは以下に示す3種の「遺物目録」くらいである。

「遺物目録」の1つ目は、史料番号1370「〔採集・寄贈・買入土器書上〕」（以下、「1370目録」と略す）で、和紙の罫紙27丁に比較的丁寧な筆致（墨書）で、125件分の出土地と収集年月日、収集方法、遺物名（点数の記載あり）が、「採集」と「寄贈」「買入」に分けて記されている。おおむね収集年ごとに10枚・3枚・2枚・6枚・6枚ずつに分けられ、それぞれ二つ折りにされているが、部分的に重複や入れ替わりなどがあるため利用にあたっては注意が必要である註7)。

2つ目は、史料番号1371「〔採集・寄贈・買入土器書上〕」（以下、「1371目録」と略す）である。こちらは、ノートから外した洋紙5枚の両面に鉛筆で、189件分の出土地と収集年（月日の記載なし）、収集方法、遺物名（点数の記載なし）が、やはり「採集」と「寄贈」「買入」に分けて、出土地（郡）ごとに走り書きされている。

3つ目は、史料番号1446「阿部家収蔵考古学的遺物目録」（以下、「1446目録」と略す）で、冒頭で触れた3つの大学への寄贈に際して作成された書類の写（謄写版、正本はペン書きと思われる）である。「阿部家」と印刷された罫紙に、寄贈品が「（一）石器」「（二）土器」「（三）其他古墳出土品、古瓦土俗品等」と大別されている。各項目の下には、小項目（たとえば「石斧類板鍔付五拾枚（1-50）」など）が列記され、そこに記された数字から寄贈品は全部で112点であったことが判明する。

この3種の「遺物目録」は、記載方法が収集年代別（1370目録）・出土地別（1371目録）・種類別（1446目録）と異なり、しかも作成者や時期がそれぞれに違っていたと考えられる。具体的には、1446目録が寄贈の仲介者（肥後和男・鍋島直康・末永雅雄）によって阿部の死後に作成されたものであるのに対し、1370目録と1371目録は、筆跡や記載内容の異同、未綴（1370目録）・走り書き（1371目録）などの特徴から、阿部自身が生前に作成した仮目録であると推察される。また、1370目録と1371目録は掲載件数に違いがあり（1370目録が125件、1371目録が189件）、単純に考えると後者の方が新しい（すなわち増補版）となるが、確定には至っていない。

なお、1446目録の末尾に「右の精細なる調書は後に阿部家に提出す」とあり、さらにもう1種類の目録が存在することをうかがわせるが、「陸奥国棚倉藩主・華族 阿部家資料」中に見出すことはできなかった。

#### 4 収集遺物の特徴

現存する3種の「遺物目録」を比較検討した結果、阿部の収集遺物について以下のような特徴を指摘することができる。

まず、収集方法（図1・2参照）については、「採集」（1370目録95件、1371目録154件）が最も多く、次いで「寄贈」（1370目録25件、1371目録25件）・「買入」（1370目録5件、1371目録5件）と続く（ただし、1371目録には5件の不明分あり）。このことから、収集遺物の大半は、阿部自身が各地に赴き「採集」したものであることが分かる。

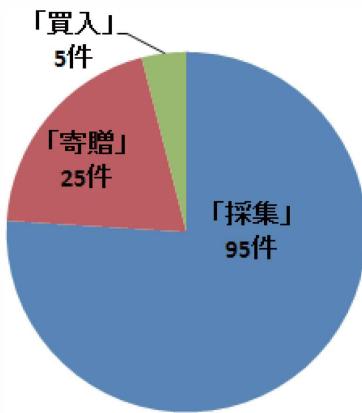


図1 収集方法（1370 目録）

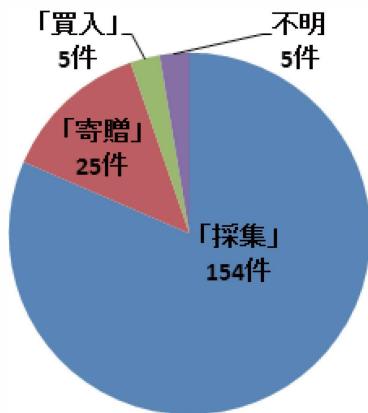


図2 収集方法（1371 目録）

次に、その収集時期（図3参照、複数年に及ぶ場合は各年に加算）であるが、最も早いのは明治21年（1371目録中の武藏国荏原郡鶴木村字千鳥久保貝塚での「採集」）で、最も遅いのが明治32年3月23日（1370目録中の磐城国東白川郡矢近字草倉での「採集」）である。年齢でいうと、阿部が28歳から39歳までの期間となる。明治21年（1888）といえば、阿部が、日本人類学の先駆者であり数々の遺跡の発掘にも携わった坪井正五郎（1863 - 1913）と出会った翌年であり、本格的に人類学・考古学へと傾倒し始める頃といえる。一方、明治32年（1899）は、阿部が芝丸山古墳の発掘に参加した翌年、そして「陳列所」を開設した翌々年にあたる。遺物収集時期の下限が人類学・考古学者として最も充実した活動を行なっていた時期と重なることは意外であり、さらに明治30年代後半から阿部と学会（界）との距離が開き始めることなどを考え合わせると、阿部をめぐる論点の一つとなるだろう。

一方、収集地域（図4・5参照）は、武藏国（1370目録75件、1371目録148件）が大半を占め、磐城国

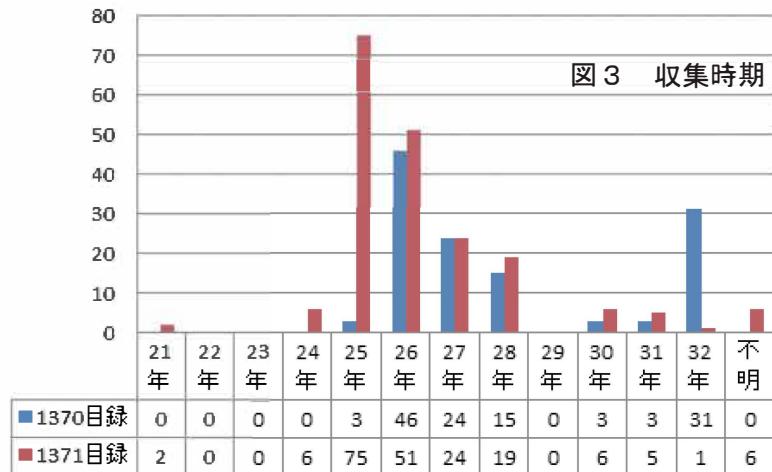


図3 収集時期

（1370目録36件、1371目録9件）ほかを大きく引き離していることを指摘できる。華族（子爵）である阿部は移動の自由が制約されていたであろうから、自宅（東京市麻布区霞町）の所在する武藏国、ついで旧領のある磐城国を中心に遺物の収集（とくに「採集」）を行なっていたと考えられる。なお、1446目録によれば、国内からの出土品だけでなく、国外の遺物（「メキシコの石斧」）も所有していたようである。

また、収集遺物の種類は、1446目録によると「石器」「土器」「其他古墳出土品、古瓦土俗品等」の3つに大別されるが、実際には石器（「石鏃」など）・土器（「縄紋土器」「石世土器」「朝鮮土器」など）・鉄器・玉類・獸骨など多岐に及び、その大半が土器、なかでも縄

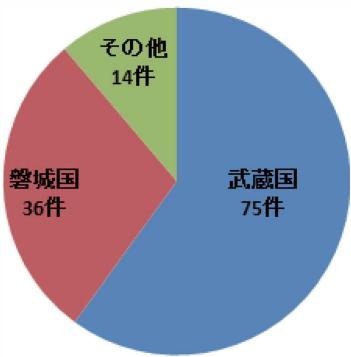


図4 収集地域（1370 目録）

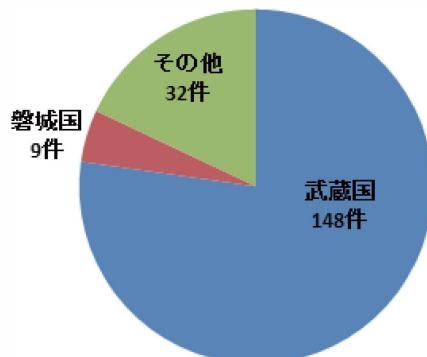


図5 収集地域（1371 目録）

文土器が主体であったことが1370目録と1371目録から見て取れる。その理由としては、縄文土器は土器表面に施される文様に特徴があり、それ以降の時代の土器と比べて、考古遺物として認識しやすかったからと考えられる。収集遺物の種類（とくに、その内訳）については、人類学者・考古学者としての阿部の問題関心と関わる重要な点なので、改めて論じる機会を持ちたい。

## 5 福島県出土の遺物

続いて、福島県内から出土した遺物に注目してみよう。具体的な地名が記載されている1370目録と1371目録をもとに、出土地と収集年月日により重複を整理した結果が表1となる。

この表よりうかがえる第一の特徴は、出土地が磐城国（現在の地理区分にあてはめると福島県の中通りと浜通り）に限定されているということである。さらに郡レベルにまで注目すると、西白河郡が27件で大半を占め、隣接する東白川郡の3件と合わせて全体の約8割を占めている。両郡には阿部家旧領の白河藩と棚倉藩の支配地があり、阿部にとってゆかりの深い地域といえる。

さらに、この点とも関連することであるが、他の地域（たとえば武藏国）と比べて「寄贈」の割合が多いということを第二の特徴として指摘することができる。福島県内（とくに磐城国）には廃藩後も旧家臣や旧領民が居住しており、彼らにより献上されたものであったと推察される。なお、収集年月日が明治32年（1899）3月に集中しているのは、この時期に阿部が白河・棚倉を訪問しているためである。この点に関しては「陸奥国棚倉藩主・華族 阿部家資料」中に滞在日誌が残されており<sup>(註8)</sup>、別稿を準備中であるが、ともあれ、この訪問時に「採集」または「寄贈」されたものが阿部の収集した福島県出土遺物の中核といえよう。

また、出土品としては、「関田村勿来停車場近傍」（番号36）の「古刀ノ折」の存在がとくに興味深い。関田村とは、現在のいわき市の南部、茨城県と接する勿来町字関田と考えられ、近隣には、金属器が多数出土し、県指定史跡となっている勿来金冠塚古墳がある<sup>(註9)</sup>。刀（鉄刀）は、その「つくり」の形式によって製作された年代が推察可能であり、仮に古墳時代のものであるとすると、当時の社会について考察する際の重要な手がかりとなるであろう<sup>(註10)</sup>。

表1 福島県出土の遺物一覧

番号	郡名	出土地	遺物	収集方法	収集年月日
1	西白河郡	大村字久保小字觀音前	石世土器破片、埴部土器片、朝鮮土器	採集	明治32年3月14日
2	西白河郡	桜岡村字狐子山	石世土器破片、石器、石鏹原片、朝鮮土器片	採集	明治32年3月14日
3	西白河郡	萱根村字小萱旧城趾	石世土器破片、朝鮮土器、埴部土器片	採集	明治32年3月14日
4	西白河郡	中野村字念仏塚附近	石器	採集	明治32年3月15日
5	西白河郡	内松村字ワダイ	石世土器破片、朝鮮土器片、石器、石鏹屑、塗色原料	採集	明治32年3月15日
6	西白河郡	三城目村字横山鬼穴古墳	埴輪破片、朝鮮土器片	採集	明治32年3月19日
7	西白河郡	神田村クラカケ古墳	埴輪破片	採集	明治32年3月19日
8	西白河郡	須乘村	石世土器破片、石器	採集	明治32年3月20日
9	西白河郡	三城目村字沼尻(古墳)	朝鮮土器片、埴部土器片、埴輪片	採集	明治32年3月20日
10	西白河郡	堤村字古屋敷	石世土器破片、石器	採集	明治32年3月20日
11	西白河郡	中ノ目村	石器土器破片	採集	明治32年3月20日
12	西白河郡	明岡村字三壇	朝鮮土器片	採集	明治32年3月20日
13	西白河郡	松崎村字犬方久保	石世土器破片、朝鮮土器片	採集	明治32年3月20日
14	西白河郡	滑津村字二子塚	石世土器破片、朝鮮土器片	採集	明治32年3月20日
15	西白河郡	深仁井田村字原田	石世土器破片、石器、石鏹、石世土製、朝鮮土器片	採集	明治32年3月21日
16	西白河郡	町屋村字町畠	石器	寄贈 (河合末吉)	明治32年3月15日
17	西白河郡	町屋村字町畠	石器	寄贈 (佐藤恒三郎)	明治32年3月15日
18	西白河郡	町屋村字古館	石世土器、石世土器破片	寄贈 (河合末吉)	明治32年3月15日
19	西白河郡	白河町字桜丁小字三十三間	石世土偶	寄贈 (須釜九八郎)	明治32年3月16日
20	西白河郡	甲子山字小萱	朝鮮土器	寄贈 (千葉亀吉)	明治32年3月16日
21	西白河郡	甲子温泉道	石器	寄贈 (菊池捨藏)	明治32年3月17日
22	西白河郡	熊倉村字折口原	石器	寄贈 (上田源藏)	明治32年3月17日
23	西白河郡	真名子村字手綱坂	石器	寄贈 (金子祐助)	明治32年3月17日
24	西白河郡	桜岡村字桜岡前古墳	鉄器	寄贈 (辺見留之助)	明治32年3月17日
25	西白河郡	神田村	石世土器	寄贈 (酒井寅三郎)	明治32年3月19日
26	西白河郡	神田村字岡ノ内	石世土器	寄贈 (鈴木久右衛門)	明治32年3月19日
27	西白河郡	矢吹村字疫病田	石世土器	寄贈 (大沼喜三郎)	明治32年3月19日
28	東白川郡	矢近村字草倉	石器、石鏹屑	採集	明治32年3月23日
29	東白川郡	矢近村字草倉	繩紋土器破片	寄贈 (井上光一)	明治28年12月
30	東白川郡	矢近村比久尼堂	繩紋土器破片	寄贈 (井上光一)	明治28年12月
31	宇多郡	小川村貝塚	石器	寄贈 (高橋信成)	明治28年12月
32	宇多郡	程田村字旭前	石器	寄贈 (高橋信成)	明治28年12月
33	石川郡	龍崎村字上代	石世土器破片、石器、石鏹原片、石鏹屑	採集	明治32年3月15日
34	石川郡	龍崎村字上代	石器	寄贈 (小林孝八)	明治32年3月18日
35	行方郡	横手村古墳	石器	寄贈 (高橋信成)	明治28年12月
36	菊田郡	関田村勿來停車場近傍	繩紋土器破片、古刀ノ折	寄贈 (高木之朝)	明治31年6月
37	相馬郡	相馬地方古墳	玉類	買入 (相馬商人)	明治31年8月27日

## 6 今後の展望

以上、本稿では、阿部正功が収集した遺物について、「陸奥国棚倉藩主・華族 阿部家資料」に残された3種の「遺物目録」に注目して検討を行なった。その結果、阿部の収集遺物は、彼が20代後半から30代（明治21年から32年）にかけて実際に遺跡を巡って「採集」したものを中心とし、地域的には彼が居住する武蔵国からの出土遺物が大半を占め、ついで旧領のある磐城国（現在の福島県浜通り・中通り）のものも含まれていたことが明らかになった。これらのこととは、今後、阿部正功に関する研究を進めていく上でのささやかな、しかし基本的な前提事項となるであろう。

ただし、残された「遺物目録」は当然のことながら文字情報にすぎず、阿部の収集遺物の実像を示すものではない。したがって、今後はまず、現存する遺物そのものの実見が必要である。具体的には、京都大学総合博物館に収蔵されている阿部正功旧蔵遺物（目録上は「阿部正友収集、一九三六年寄贈」）について、考古学的手法により検討を行なうことが最重要の課題となる。加えて、それ以外の収集遺物の所在確認も並行して進めたい。後者については困難が予想されるが、仮に所在が判明しない場合でも、阿部の手による調査メモやスケッチなどが分析の手がかりになるのではなかろうか。

これらの作業を通じて、阿部正功の収集遺物の全体像や彼の人類学者・考古学者としての側面を解明し、さらには収集遺物を一堂に集めた「陳列所」の復元展示などを行なうことができればと考えている。

<註>

- (註1) 丸山美季「阿部正功の生涯と学問—人類学・土俗学・考古学—」『学習院大学史料館紀要』17（2011年）。このほか、学習院大学史料館編刊『目白の森のその昔 学習院と考古学』（2010年）、福島県文化財センター白河館編刊『ふくしま考古学研究の春暁』（2012年）も参照。
- (註2) 京都大学文学部編刊『京都大学文学部博物館考古資料目録』1（1960年）。このうち87件が阿部家（正功の孫である阿部正友）からの寄贈品である。なお、同目録所収の考古資料は、現在、京都大学総合博物館に収蔵されている。
- (註3) 学習院大学史料館編刊『陸奥国棚倉藩主・華族 阿部家資料』（2001年）。
- (註4) たとえば、「石世遺跡搜索記」（「陸奥国棚倉藩主・華族 阿部家資料」史料番号1333）など。
- (註5) 高山優「『芝円山古墳調査略記』について」『学習院大学史料館紀要』17（2011年）参照。
- (註6) たとえば、「棚倉紀行（ふみ月の記）」（「陸奥国棚倉藩主・華族 阿部家資料」史料番号1317-1）。
- (註7) 学習院大学史料館で公開されているマイクロフィルム版の撮影順により各丁を五十音順（アイウエオ…）に仮称し、1371目録記載の収集年月日や出土地などと照合したところ、作成時の並び順は以下のようであったと推定される。コケクキカオ〔サ（オの反故）〕エウイアナ〔ス（ナの反故）〕シテツチニトタソフヒハノネヌ。
- (註8) 「（白河滞白中・巡検中日誌綴）」（「陸奥国棚倉藩主・華族 阿部家資料」史料番号1427）および「明治三十二年三月廿一日ヨリ同廿七日迄棚倉御滞在中日誌」（同史料番号1428）。
- (註9) 勿来金冠塚古墳の正式な報告書は刊行されていないが、発掘調査成果については、横須賀倫達「勿来金冠塚古墳出土遺物の調査Ⅰ」『福島県立博物館研究紀要』第19号（2005年）に詳しい。
- (註10) たとえば、和田伸哉「福島県内における板鍔付鉄刀の流通、一八幡横穴墓群、郭内横穴墓群、跡見塚古墳出土例を起点に—」『福島県文化財センター白河館研究紀要』2014（2015年）。
- （謝辞）本稿の作成にあたって、丸山美季氏（学習院大学史料館）・内野豊大氏（白河市都市政策室文化財課）よりご教示を得ました。記して御礼申し上げます。